

ミャンマーの商社が寄贈

大仏のまなざし

鎮魂

「被災者の力に」

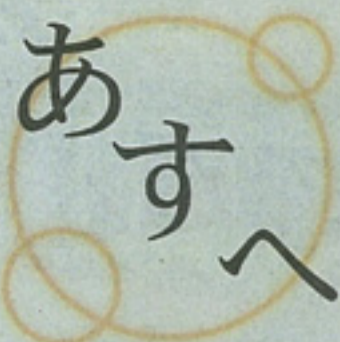
東日本大震災の犠牲者の鎮魂を願い、ミャンマーの総合商社「TOMOSADA」が寄贈した大仏の開眼法要が25日、建立地の宮城県南三陸町志津川の「海に見える命の森」であった。

ミャンマー産の大理石で 建立を終えていた。

造られた大仏は台座を含めて高さ約5.5メートルで、志津川湾を一望できる丘に立つ。町内で南三陸ホテル観洋を経営する阿部長商店（気仙沼市）に贈られ、10月下旬に

法要には関係者ら約80人が出席。ミャンマーと地元僧侶がお経を唱え、大仏に魂を吹き込んだ。

「被災地の光景に胸を打たれた」。TOMOSADA共同代表のマウン・テツ・ミヤ・ウーさん(52)は5年前に気仙沼市を訪れ、津波に襲われた気仙沼同洋高の旧校舎などを見て回った。「被災地では多くの人が命を落とした。被災者を慰めるため、力になりたい」



東日本大震災

宮城・南三陸で開眼法要



との思いを抱いた。この時、現地を案内したのが阿部長商店の関係者だ

った。ホテル観洋が震災後に住民有志やボランティアと「海に見える命の森」を整備していたこともあり、大仏の建立が実現した。

阿部長商店社長の阿部泰浩さん(56)は「多くの人の協力でこの目を迎えられたことに感謝したい」と話した。

震災の犠牲者の鎮魂を願い、建立された大仏